

「王賜」銘鉄剣のX線的調査と銘文の表出

永 嶋 正 春

はじめに

1 X線的調査

2 象嵌銘文の表出と形態の修復

おわりに

論文要旨

千葉県市原市稻荷台1号墳出土の「王賜」銘鉄剣は、歴博におけるX線透過検査により見いだされており、わが国の5世紀を代表する文字史料である。文字は、象嵌技法によって、鉄剣の関近くの表裏に記されており、現在、表に5文字、裏に2文字を残存する。しかしながら関付近の大きな欠損を考慮すれば、当初は、表裏とも6文字ずつの計12文字であったと想定される。7文字のうち、5文字については文字が確定できており、「王賜」に始まる簡潔な文面からして、典型的な下賜刀であると考えられている。

この鉄剣に関しては、銘文発見後しばらくしてから、関係者の責任において『概報』という形でその調査内容のあらましを公表した。しかしながら、筆者の行ったX線的な調査に関しては、まだ補うべき事実関係を残していた。またその後、筆者が象嵌文字の表出と形態の修復とを担当したこともあるって、それらの作業過程で得られた事実関係についても早急に公表すべきであると考えた。

本稿では、本来の目的である文字の表出と形態の修復について報告するとともに、併せてX線的な調査の結果を報告し、若干の検討を行った。

本鉄剣は、地金を残存しておらず、多くの個所で折損していた。また一見蛇行剣に見えるものの、本来はまっすぐな剣であることも判明した。したがって象嵌表出後、アルミニウムを心棒とし、エポキシ樹脂で補填、補強することによって、展示に耐える強度を持ったまっすぐな鉄剣に想定復元した。

蛍光X線的に見て、鉄剣のほぼ全体から、微量な銅とヒ素とが検出された。これは元の地金の特徴である。象嵌は、銀、金、銅からなる3成分系の合金であった。銀が多い割に金色が見られるのは、銅が存在するからである。文字象嵌の字画は、極めて合理的に省画されており、そこにはなんらかの強い企画性を見ることができると思われる。